

平成30年度事業報告書

特定非営利活動法人 アニマルクラブ石巻

事業の成果

『動物達の現実に意識改革を』

①野良猫問題は社会問題

春から夏は猫の出産シーズンで、「物置で野良猫がお産した」「近くの公園に子猫が捨てられている」といった相談が次々にきます。ほとんどの人は、「引き取ってください」と懇願するか、「どうしたら良いのですか?」と解決を委ねてきます。3月頃から始まり秋まで続き、5月～7月のピーク時にはメールを開けば連日、似たような内容が続くので、つくづく「これは政治が取り組まなければならない社会問題だ」と痛感します。

その人たちには、「アニマルクラブは公的援助もない、有志のカンパで運営しているささやかなボランティア活動で、引き取って世話をしていく力はありません。不幸な動物を救いたいなら、まず自分が動かなければ何も進みません。助ける努力をする人には、保護するケージを貸したり、週に1度開院する動物病院で治療やワクチン、親猫の避妊手術などのサポートをして、ホームページに掲載したり毎月里親会を開いて飼い主を探す協力をするので、何とか頑張ってください」と応えます。過半数はそれきり返事をよこしません。自主的に対処する前向きな人たちには、こちらも足りない部分を手伝う努力をします。ボランティアが担えるサポートは、そこまでが精一杯、それを超えてしまえば、アニマルクラブ自体が多頭飼育の崩壊を招いてしまいます。

行政に相談する人達もいます。動物愛護法が改正されて、保健所も市役所も、市民からの相談に慎重に答えなくてはなくなりました。「野良猫が迷惑で困っている」と言われても、もう昔のように捕獲器を貸し出すことはできません。「うまく共存してくださいなんて、訳の分からないことを言われた」と語っていた人がいました。餌付けした野良猫のことで、近所から苦情を言われた人が相談した時には、「餌を少しずつ減らしていったら、来なくなるのではないかと」と答えたそうです。

何が正解か解らないまま、当たり障りのないことを言って、納得しない人には「ボランティアさんに相談してみてもどうですか?」と勝手にこちらの電話番号を教えているそうです。担当者は、私達が応えているように、「避妊・去勢手術をして、トイレも設置して、近所の庭に排便するなら行って片付けて謝ること。トラブルは、町内会長さんなどに間に入ってもらうように」と答え、受け売りだけでなく、実地で学んでアドバイスできるようにならなければならないと感じます。

こちらが歩み寄って、役立つ印刷物を使って欲しいと持ち込んでも、行政の職員は「一つの団体だけを特別扱いにするわけにはいかない」と、意図することを察しもせず、前進の可能性を自ら踏みつけています。野良猫の問題にかけては、何十年も前から自分達よりずっと実体験を積んでいる動物愛護団体に教えてもらう姿勢もなしに、行政に寄せられた相談に困れば、無断で、無給のボランティアに丸投げする態度を反省してもらわないと、私達の活動は、近い将来力尽きてしまうでしょう。

②『殺処分0構想』の現実

勿論、自分は何もしようとしなくて、解決を依頼するだけの市民の意識にも問題はあります。誇張した無責任なテレビ番組の影響もあり、動物愛護団体は、あちこちから動物を収容して、里親が見つからなければ一生面倒を見てくれる所だと思い込まれていますが、そんな施設を運営するとしたら、場所、設備、人手…莫大な費用がかかり、しかも永続的に運営していかなくてはならないのだから、できるはずがないことを理解しようとしません。

行政が引き取ることができるのは、最終的には殺処分していいというシステムを容認されているからです。しかし、近年、『殺処分0にしていこう!』というスローガンが、あちこちから上がっています。1頭も処分しないということは、人に馴れずに噛んできても、介護が必要でも、生かし続けていくということです。

0(ゼロ)を提唱するのは、動物の生態、習性、行動と心理を知らない、現場を経験していない人達のような気がします。終生面倒を見るということは、個体管理をして、そうした厄介とも死ぬまでつき合うということです。それなくしての、頭でっかちの《殺処分0構想》は、動物達をかえって苦しめる結末になりかねません。1人の人間が見れる動物の数には、限界があります。

そもそも、日本においては人間の所有物扱いで、《基本的人権》に値する権利が認められていない動物に、国や県がそんな巨費を投じるなんてできるのでしょうか？この人手不足の日本で、そんな無理難題に挑む前に、望まれない命が生まれないように、蛇口を締める避妊・去勢手術の徹底実施に予算を回すことこそが、現実策です。

だからこそ、低価格で避妊・去勢手術ができて、無理のない分割払いや車のない世帯への送迎も引き受ける『不妊予防センター』を2008年から開院しています。2019年3月末で、カルテは5500枚を超えました。

手術の予約に空きがある時は、野良猫が増えている地区に捕獲器を仕掛けて、手術やワクチンなどを施して、手術した証の耳カットをして元の場所に放すTNR活動もしています。

個々の事例の中には、自分で面倒を見る約束だった人が途中で匙を投げて、こちらが世話を続ける羽目になる場合や、手術に連れてこられた時点で、妊娠末期だったり体調が悪くて手術ができなくて、出産させて里親探しをしなければならなくなるケースなど…引き取らない前提であっても、年々アニマルクラブで世話をしていく動物の数は増えていくのが現状です。一方分割払いの約束が守られないケースも度々あり、2018年度、不妊予防センターは税金を支払った分がそっくり赤字収支となっています。この二重の負担で、年々活動継続は困難になっていくでしょう。

③担い手の輪を広げる

私達にできることは「1匹でも多く助ける」ことではなくて、「この現実を1人でも多くの人に伝えて、社会を変える方策を実現していく」ことだと認識しています。アニマルクラブの活動は40年余りになります。沢山のご家族に、犬や猫の里親になっていただきました。地元スーパーのレシートキャンペーンに参加させてもらったり、中学校などに講演に行ったこともあります。そうした社会とのつながりのおかげで、「ペットが飼える家に引っ越したら、アニマルクラブからもらおうと話していた」とか、「高校生になったら、アニマルクラブにボランティアに行こうと思った」などという、人との絆が育まれます。

これからの動物愛護は、『誰もがその都度自分にできるボランティア活動の担い手になる』というスタンスを社会に広めていくことだと考えます。ボランティア活動の役割は、社会問題が教えてくれる行政の不備をサポートしつつ、やがて法律が改正されてシステムが機能するように、やってみせながら働きかけていくことだと考えます。

そして、その輪が地域に留まらず全国に波及することが、新たな支援も呼んでくれます。2018年度も4月には、大阪と兵庫からボランティアでトリマーと臨床セラピストが来て、ペットと飼い主の健康生活のための講演や施術をしてくれました。参加者から、「病気のある子や老猫のケアのしかたを教わり、自分の体調に耳を傾けることも学べた」と感謝されました。

8月には、東京都世田谷区のギャラリーが会場を提供してくださり、震災で亡くなったボランティアの五井美沙さんが描いた『アニマルクラブの仲間たち』のイラスト展と、『震災からのアニマルクラブの歩み』のパネル展を2週間開催しました。後日パネル展を観た方から、カンパが送られてきました。

私達メンバーの高齢化と人手不足を省みれば、今後は《活動の終活》を念頭に置かなければなりません。40年かけて体得してきたことや築いたものを、無駄にしないでさらに継続発展していくためには、行政が原点に立ち返り「誰のためにやるべきことで、そのためには何をすべきなのか？」を真摯に考え、ボランティアを利用するのではなく、連携して学ぶ姿勢を持って、早速行動することをお願いします。

